

平成30年度 私立大学研究ブランディング事業外部評価委員会(未定稿)

日 時：平成31年2月22日(金)

14:00~15:00

場 所：岐阜女子大学本館2階
中会議室

委員会次第

司会：井上透 デジタルアーカイブ研究所長)

【議題】

1. 開会 (14:00~14:10)

【学長挨拶】

- 本日は、「私立大学研究ブランディング事業」の外部評価委員会にご多忙のところ参加いただきありがとうございます。
- さて本学は、昨年度で創立50周年となり、地方の大学でありながら全国に誇る(キラッと光る)特色を持った大学であります。
- その一つが、文化・産業遺産をデジタルで記録・保存し活用するデジタルアーカイブでございます。
- デジタルアーカイブについては、本学は20年前から研究を進めており、現在、5千名近い人材であるデジタルアーキビストを、本学を中心に養成し、全国に輩出しております。
- その成果が認められ全国規模のデジタルアーカイブ学会の設立にもかわり、現在も主要メンバーとして東京大学や京都大学・国立国会図書館などと共にデジタルアーカイブの研究を進めているところです。
- “地域で主体的に活動できる人間力”は、あらゆる分野で学生自らが、様々な地域資源を有効に生かし、新たな知を創造すること。
- 並びに、地域の様々な解の見えない課題に主体的に向き合い、地域課題を解決することと考えております。
- また、このような人材の養成こそが、地域に貢献する大学として重要であるとと考えております。
- 地域資源のデジタルアーカイブは、自分の生まれた地域の様々な文化資源などをデジタルアーカイブしてみるにより、これまでに気付かなかった地域の魅力を素材・記録を通して「見える化」することができます。
- この点において、デジタルアーカイブは、地域の理解を深め、新たな価値を発見し活用していく上で大切な教育活動でもあります。
- しかし、このような地域資源のデジタルアーカイブには、地域の人々の参加が

必要不可欠となってまいります。

- 特に、地域の資料の発見や収集、デジタル化には、地域の実情に応じた活動が重要であり、今後、大学が協力させていただき地域の皆様方が身近な場で地域のデジタルアーカイブ化をすべきであると考えています。
- このためには、学生自らが、自分たちの地域の「地域資源」をいかに主体的に発見・記録・保管・評価し活用することができるかが課題です。
- 本学では、このような地域の人々や、大学、学校、社会教育施設などとの協働によるデジタルアーカイブの活動を、すべての学部・学科において重要な教育活動として捉え、私立大学研究ブランディング事業において実施しております。
- 今回の外部評価委員会において、本日までご参加の委員の方のご意見やご指導を賜って、本学の学生と地域が今後継続して協働して、地域資源のデジタルアーカイブが進展し、それぞれの地域の活性化・地方創生につながれば幸いです。

2. 私立大学研究ブランディング事業の概要の報告（14：10～14：20）

三宅茜巳（文化創造学部・教授）

- 私立大学研究ブランディング事業とは、学長のリーダーシップの下、大学の特色ある研究を基軸として、全学的な独自色を大きく打ち出す取組を行う私立大学に対し、経常費・設備費・施設費を一体として文部科学省が重点的に支援するものです。
- 平成29年度の同事業には、188校から申請があり、計60校（タイプA（社会展開型）：33件、タイプB（世界展開型）：27件）が選定され、本学が岐阜県内では唯一選定されました。
- 本学が採択を受けた社会展開型とは、地域の経済・社会、雇用、文化の発展や特定の分野の発展・深化に寄与する研究で、特定の地域あるいは分野における、地域の資源活用、産業の振興・観光資源の発掘・文化の発展への寄与、企業や雇用の創出等を目的とするものです。
- 事業名は、「地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための基盤整備事業」ということで、平成29年度より5年間の事業期間になっており、本年度が2年目となります。
- なお、初年度の平成29年度については、採択が決まりましたのが11月と遅く、外部評価委員会を設定することができませんでしたので、大学の外部評価委員会と併せて評価をいただいたところです。
- 従って、本事業のみでの外部評価委員会としては、初めての委員会となります。
- さて、本事業は、地域に根差し地域社会に貢献する大学として、本学独自で育

んできたデジタルアーカイブの研究を活用し、地域資源のデジタルアーカイブ化とその展開によって、伝統文化産業の活性化などの地域課題の実践的な解決や新しい文化を創造できる人材育成を行い、地域の知の拠点となる大学を目指すことを目的としています。

- 具体的には、地域における地方創成イノベーション計画に呼応し、以下に示す地域の代表的な伝統文化産業と文化遺産について、デジタルアーカイブ研究とその利活用を行い、それぞれ伝統文化産業の振興と新たな観光資源の発掘を行うことで、以下の3点を具体的に上げさせていただいております。

1. 飛騨高山の匠の技デジタルアーカイブと伝統文化産業の振興
2. 郡上白山文化遺産のデジタルアーカイブと新たな観光資源の発掘
3. デジタルアーカイブ研究の拡充による地方創成イノベーションの創出

- この事業の結果として、本学としては、大学全体として地域と大学が緊密に連携してデジタルアーカイブ研究を推進し、地域で新たな価値を創造できる人材の養成を行うことを考えております。

- このために本学では、全国のデジタルアーカイブの拠点大学として、2013年より「知の増殖型サイクル」を開発し、観光、教育、企業の分野での人材育成の試行研究を行ってきました。

- また、その研究成果として、沖縄や高山の観光の振興並びに沖縄県の小学校では有意な学力の向上が認められ、デジタルアーカイブの利活用が本事業の推進に有効との感触を得ています。

- 本事業においても、地域の課題を解決するための手段として、「知の増殖型サイクル」を活用して進めております。

- なお、本年度の具体的な活動実績につきましては活動状況でお話をさせていただきます。

- 以上で、私立大学研究ブランディング事業の概要の報告を終わります。

3. 本年度活動状況の報告（14：20～14：30）

久世 均（文化創造学部・教授）

- 最初に、飛騨高山の匠の技デジタルアーカイブと伝統文化産業の振興についてお話をいたします。

- 飛騨高山の匠の技デジタルアーカイブの目的は、「伝統文化産業（飛騨春慶・一位一刀彫等）を多視点でデジタルアーカイブし、歴史的な視点を総合的にまとめ、匠の“こころ”をオーラルヒストリー等により構成し、これらの一部を海外へ発信することにより伝統文化産業の振興を図ることです。

- また、伝統文化産業における匠の技とその歴史的な背景をまとめてデジタルアーカイブ化することにより、伝統文化産業の理解と継承が容易になりますと考えております。
- そこで、先にご説明をいたしましたように、理解と継承のプロセスで生まれた新しい知見を「知の増殖型サイクル」で取り込み、その利活用によって地域社会の振興を支援できる。と考えております。
- 飛騨高山の匠の技デジタルアーカイブにつきましては、平成28年度より先行して取り組んでおりましたので、現在約4万件の動画データや静止画データをデジタルアーカイブしております。
- 特に、デジタルアーカイブにおける静止画データでは、多視点データを中心に、1箇所の施設ですと約100枚近い静止画データを収集しております。
- また、これらのデジタルアーカイブしたデータは、Web 公開用データベースと非公開長期保存型のデータベースにわけて保存管理しております。
- もちろん、データベースについてはメタデータ（データのデータ）と言われる二次情報を付加して保管しております。
- 特に、デジタルアーカイブにおいては、この二次情報が重要であります。
- この二次情報につきましても、世界基準に準拠した二次情報項目を設定し、保管しています。
- 次に、郡上白山文化遺産のデジタルアーカイブと新たな観光資源の発掘について説明をいたします。
- この、白山文化については、岐阜・富山・石川・福井・福島という県域を超えたデジタルアーカイブとなります。
- どうしても、市町村でのアーカイブということになりますと行政区域での収集が限度となりますが、今回は、これらの県域を超えた白山文化遺産のデジタルアーカイブを構成することを目的として実践しています。
- このことにより、郡上白山の文化遺産の調査、建造物、建築物群の歴史的・文化的価値の調査並びに白山信仰の三馬場の調査を綿密に行い、デジタルアーカイブ研究により、新たな観光資源の発掘を支援できると考えております。
- 現在、静止画。動画を合わせて1万件近いデータを収集し、飛騨高山と同様にデータベース化を図っています。
- 3点目は、デジタルアーカイブ研究の拡充による地方創成イノベーションの創出ということで、デジタルアーカイブの新たな展開を考えております。
- 具体的には、収集したデジタルアーカイブデータを全て利活用できるようにオープンデータとするように著作権などの処理を図ってまいります。
- このことにより、異業種の産業や教育・観光・食文化などさまざまな場面で活用できるデータとなりうると考えております。

- 特に、教育におきましては本学の初等教育学専攻での地域教材への活用、観光専修での観光情報への活用として、沖縄「おうらい」と同様に飛騨高山匠の技「おうらい」や白山文化「おうらい」などの作成により、文化を生かす観光に取り組むことができると考えております。
- また、伝統文化産業の一位一刀彫や伝統的な文化遺産の能面などを三次元スキャナで測定し、これらの設計データを保存することにより、これらのクローン文化財を作成し、これらを生かした副次的なキーホルダーなど新しいものに変換することができます。
- このように三次元データのデジタルアーカイブという新しいデジタルアーカイブにも取り組んでまいります。
- 今後このような産業の創出が必要になって来ると考え、これらのモデルを提案することができると考えております。
- また、ここに示すようにデジタルアーカイブしたデータを活用した多言語に対応したデジタルサイネージにも取り組んでおり、これらが地域の観光の発掘に寄与できればと考えております。
- 本事業は、解の見えない地域課題の解決をするための地域資源デジタルアーカイブとそのメソッドを確立することです。
- 地域の知が適切に循環・増殖することで新たな価値の創造できるサイクルを確立し、
- また、これらを実践できる高度な専門的な知識を持つ人材の養成により雇用の創出を促進することができると考えています。
- これらの結果として「知の増殖型サイクル」としてのデジタルアーカイブの効果が認められ、さらにデジタルアーカイブの新たな展開が期待できると考えています。
- また、これにより大学は地域に開かれた「知の拠点」となりうると考えております。
- 今回の外部評価委員会におきまして、今後に関わる有益なご示唆やご指導をいただければ幸いです。

【質疑応答】 ○印：委員 ●印：事務局

- 飛騨匠の技を、いろんな角度で記録・保存することは有効であると考え。記録する際の苦労・大変さはあるのか。
- 5, 6台での多視点撮影にはタイミングが難しく、昔はそのようなツールがなかったので本学でツールを開発して撮影していた。現在はそのようなツールがあるので、それを活用している。
- また、昔は住所を記録していたが、市町村合併等により住所が変わることがあ

るため、GPSで記録するようにしたが、これも最近ではGPSでの記録機能内蔵のカメラが開発されており、そのようなデジタルアーカイブの技術も進歩している。

○メタデータの22項目はどのように決定したのか。

●国際的なメタデータの基準（ダブリンコア）を基に、かつ本学のこれまでの研究から地域資料に必要な情報を付け加えて、現在の22項目とした。メタデータが多くても登録に大変なため、最小限度の22項目に絞った。

○このような取り組みをしているのは他にもあるのか。

●20年前に文化情報研究センターを設置して以来、メタデータの開発・導入などを行い、1つの地域だけではなく、全国の地域資源に対してデジタルアーカイブを行っているのは、本学のみである。

●ただ、国立民俗博物館、歴史博物館が、各々の専門性に合わせたデジタルアーカイブ化を始めている。また、国文学研究資料館では個別の文献に対してIDの設定とデジタル化を行っている。また京都大学が、過去に起こっている地震の情報の収集を継続的に行っている。分野ごとのためバラバラになっているが、デジタルアーカイブは多くの機関では行われている。

○総括的、総合的に行っているのは岐阜女子大学のみである。そうすると他の地域資料のデジタルアーカイブ化に対応できるような、各地に広げる試みは行っているのか。

●そのためには、まず人材育成をしなければ、全国的に広げることはできないと考えている。そこで、本学が中心でデジタルアーキビストの養成を行っており、現在デジタルアーキビストの資格保有者は5,000名を超え、各研修には自治体や図書館、博物館等の施設、自衛隊などから、どのようにデジタルアーカイブを行ったら良いかを学びに来ている。ただ全国的に網羅しつつ、多面的に、文化財としてだけでなく企業についてもデジタルアーカイブを行っているのは、本学のみである。

○その活動に、学生はどのくらい参加しているのか。学生が地域で学び、学んだことを他の地域で生かすことができるように、大学は求められている。学生がどのように参画して、デジタルアーカイブが授業等にどのように生かされているのか。

●地域のデジタルアーカイブ活動のまとめとして、毎年、数か所で“白山文化はいいもんだ”（デジタルアーカイブ in ぎふ郡上）といったフォーラムを開催している。昨年度は高山で実施している。

●これらの、フォーラムには学生が60名程参加しており、さらには司会や記録などの運営も学生が行っている。また地域資料の収集、撮影やデータベース化も学生が行っており、卒業研究に結び付けている。

- また、配布した資料（冊子数冊）のように教材化も行っている。教材化もデジタルアーカイブの活用の1つであり、活用方法についても学びつつ、授業で用いている。資料を基に知識を付けて、フィールドに出て活動し、それをまとめて残し、先輩から後輩へ伝えている。これを通して人材育成ができると考えている。
- 数年前から、本学では全学的には準デジタルアーキビストの資格を、ほとんどの学生が取得しており、デジタル化やその処理の方法、どのように記録して残すかについて学んでいる。
- またデジタルアーカイブ専攻の学生については、現場に行き撮影をしており、授業「特別プロジェクト」にて、どのように撮影したらいいか、機器の使い方、著作権処理はどうしたらいいのかを現場で学び、実力を付けて、デジタルアーキビストとしてプロフェッショナルを育てている。このように、2段階に分けてデジタルアーカイブの人材育成を行っている。
- 人材育成で学生が撮影されているとのことで、問題はどこを記録するか、どのように写すかが難しいところかと思うが、実際にはどのように指導しているのか。
- 撮影については、経験によるものが多いため、実際に撮影にいき、その結果を見て、この撮影ではこの部分が分からない、このアングルが良いのでは等、リフレクションをしつつ、学生からの提案も聞きながら実施している。撮影したものが全て使えるわけではなく、これからも撮影しつつ、残すべきもの、使えるものを選定している。
- 経験、技術を身につけるのも大切であるが、計画的に静止画で良いのか、動画が必要なのか、テキスト（文書）が良いのか、中身のプロセスを考えた判断の仕方も実践で身につけていっている。例えば技術の記録として、手元を撮影するときは匠の視線から撮影すると技術が伝わりやすい、畳の場合は上から取っただけでは死角が生じるため、下にカメラを置くことで返しがどうなっているのかが分かるなど、現場で知恵を絞って開発していくのが重要であると考えている。
- 今の話は、長良川の鵜舟の造船技術にも関係があり、現在、鵜舟を造ることができるのは1人しかいない。かつ中流と下流では作りが違う。共通する問題点として、売って生活ができれば後継者はできる、生活ができないから後継者がいないということである。誰かがスポンサーになって、安定的に購入してもらえれば続くだろうが、それができないから技術がなくなってしまう、それでデジタルアーカイブが必要になるという悪循環が起こっている。鵜匠の衣装を造れる人もいない。どの方向から撮影すれば良いかの問題とともに、安定した供給ができる仕組みを作り上げる必要がある。デジタルアーカイブは、伝承

の問題の中から出てきたという側面があるのではと考える。

4. 評価委員講評 (14:30~14:55)

【A委員】

- 高山文化を長い時間をかけて残して頂き、ありがたいと思っている。たった10年でも街並みや生活が変わっているため、貴重な資料になると思う。高山でも伝統文化産業の振興と新たな観光資源の発掘が課題になっている。祭りを見るだけでは観光資源にならない、アドバイスを頂きたい。
- 去年、屋台技術を見に行く機会があり、かんながけ体験を行った。一般の人と高い技術の接点を用意する必要があり、ワクワクさせるものをどのように演出したらよいかを考えることは、観光資源の発掘となり、地方創生につながるのではと考えている。教えて頂きたい、広めて頂きたい、新たな視点での観光資源の発掘があれば、発信していただきたい。

【B委員】

- 3つのキーワード、伝統文化産業の振興、観光資源の発掘、地方創生はとても大事なことと思う。過去の文化をどのように継承させるかについては、デジタルアーカイブは重要である。
- 学生はいろんなものに興味・関心がある中で、地域の人など様々な人の多様な価値観を尊重して、信頼関係を築き上げていくのも大事である。そういった中で、共同作業が大切であり、地域と直接関わって学びあう機会・場が重要である。面として広げる工夫が必要かと思う。
- 計画書には「地域に根差し地域社会に貢献する大学として、本学独自で育んできたデジタルアーカイブ研究を活用し、地域資源のデジタルアーカイブ化とその展開によって、地域課題の実践的な解決や伝統的産業の活性化並びに新しい文化を創造できる人材育成を行い、岐阜地域の知の拠点となる大学を目指すものである。」とある。
- そのためには、岐阜女子大学のすべての学生に可能となるような授業を進める必要がある、是非進めていただきたい。物の見方の指導も必要である。学生を大事にして、この活動を全国的に広がるようにしてほしい、期待している。

【C委員】

- 珍しい活動であると思う。データマイニングで価値を見出す研究をしている。その中で3つの団体を旗揚げしている。デジタルアーカイブ研究機関研究会(20くらいの機関と大学の先生等で構成)、デジタルアーカイブ学会(短期間で会員数が500名)、デジタルアーカイブ推進コンソーシアム(民間の団体で

デジタルアーカイブに関する製品サービスをやろうとしている 22 社)。岐阜女子大学とは、デジタルアーカイブ推進コンソーシアムと提携を組んで、地域資料のデジタルアーカイブについて検討を始めている。岐阜女子大学は 20 年の歴史がある。また教育を目的としているところにも、学ぶことが多い。

- いろいろなテーマがある中、地域資源、地域観光を効率的にうまくやっていくために、デジタルアーカイブを中心に行っている。
- 伝統的な文化的なものがいくらあっても、産業として食べていくことはまず不可能である。技や知を継承して、循環させて、その裏で経済が動くようにするのはどうしたら良いか、それこそが大学が考える役目であると思っている。産業界も含めた、日本の残すべき技や知識をうまく回る仕新しい組みを見出したいと考えたい。あと 300 年くらいかかるかもしれないが、岐阜女子大学には積極的に活動していただき、参考にしていきたい。

【D委員】

- 高い技術と一般の方をどのようにコラボレーションするか、地域と学生をどのように共同作業としてつなげるか、民間企業をどのように生かすか、行政でも連携を重視しており、いずれも共通の課題であると考えている。岐阜市ではシビックプライドとして、地域の人に愛着を持っていただいて行政が始まると考えている。深い理解と共感が必要である。
- 岐阜の地域では和傘が対象になるのではないかと、職人の高齢化が進んでいる。うれしいことに若い女性の方が和傘職人として自立しつつある。岐阜の和傘がなくなると、歌舞伎の和傘もなくなるなど、いろんな伝統文化に影響がでる。和傘も分業制になっており、誰かがやめてしまうと続かなくなる。デジタルアーカイブによって守っていくことが重要になるのではと思う。
- デジタルサイネージも身近になっている。岐阜市も取り組む予定である。地域資源をデジタルサイネージで発信するにも素材が重要である。デジタルアーカイブを推進することで、岐阜市だけでなく各市町村でも生かしたいと思うので、どんどん蓄積できるといいと思う。

5. 閉 会 (1 4 : 5 5 ~ 1 5 : 0 0)

富士霸王 (家政学部長)

- 本学もこの私立大学研究ブランディング事業において、各教育委員会にもご協力をいただき、既に主な飛騨匠の技デジタルアーカイブでは、40,000 枚近い静止画・動画をデジタルアーカイブしております。
- また、白山文化遺産に関するデジタルアーカイブ化も進めており、現在 10,000 枚近い静止画・動画をデジタルアーカイブしてまいりました。

- 今後、このデジタルアーカイブを活用して、解の見えない地域課題の解決をするための地域資源デジタルアーカイブを推進してまいりたいと考えております。
- 委員の皆様、本日は貴重なご意見を賜りましてありがとうございました。
- 今後、本学としましては、大学が地域の知の拠点として地域と連携しながら地域の課題を解決するためのデジタルアーカイブ化と人材養成を進めていきたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。